

アゲハ

伊藤久昭

十五階建てマンションの最上階。南東の角部屋。一年前、哲夫は時子と結婚したが、その三カ月ほど前に、このマンションを購入した。その間の三カ月は実に忙しい期間であった。仕事と結婚の準備と、三年間ほど住んでいたアパートからマンションへの引っ越しで、何がほかかわからないような期間であったが、それでも何をしていても楽しい期間でもあった。

人口五万ほどのK市には、高層建築は少なく、最近建て直した市役所より高く、市内で最も高い建築物というのが、このS・Rマンション販売のキャッチフレーズであった。市の中心部からは車で十分ほど離れている。周囲は相当広い範囲が、人家の点在する田畑や耕作放棄地と思われる荒地地で、そこに建っている薄茶色と一部褐色のツートンカラーのS・Rマンションは、いかにもこの地のトップを誇るかのように聳えている。マンション

から眺めると、西方は丘から里山、さらにその先には青く見える山脈が横たわっている。東方は丘陵のはるか先に、K市の市街地が望まれ、天気の良い日には、その向こうに広がる海面の、キラキラ輝いているのが遠望できた。マンションの購入時期には、既に時子との結婚の約束ができていたので、二人で何箇所かのモデルルームを見て回った。説明する販売員のほとんどは、若夫婦として応対していたが、もちろん二人は訂正しなかったし、それも二人だけの密かな喜びであった。結局、哲夫の高層建築への憧れが強かったという単純な理由で、このS・Rマンションに決定した。

二人の新生活は至って平穩であった。自動車のセールスをしている哲夫は、朝販売店へ出勤し、看護師をしている時子は、市民病院へ出勤した。哲夫の仕事は客の都合によって、早朝や深夜になる場

合があり、時子も交代勤務のため、夜勤や代休があり、すれ違いも多かったが、それぞれができる限り、二人の生活を大事にして、二人の生活を育んでいた。家が少なくガラガラだったマンションの部屋が、二人で相談しながら買い揃える、生活用品やちよつとした装飾品で満たされていくのを見てみると、時子はこれの良いのかと思うほど、幸せを感じた。

これまで時子は、自分には高所恐怖症があると思っていた。子供の頃は、遊園地の高い遊具が好きになれなかった。友人たちと行った旅行で、山峡に架かる高い吊り橋を、自分だけ渡れなかった。日常でも、数階のデパートで屋上から見下ろすと、腰の辺りから背骨に沿って、冷たい何かが這い上がってきて、そのままじつとしていられなかった。

結婚して住んだS・Rマンションでも、最初は堪えられなかった。出勤する哲夫をバルコニーから見送る時、初め頃は、腰を引いて太い手すりにしがみ付いて、真下の駐車場の車に乗り込む、小さな哲夫を見送った。見上げた哲夫が手を振るのを、辛うじて見届けるのが精いっぱい

であつた。しかし、その状態は精々一カ月ほどで、時子は全く気にすることなく、出勤する哲夫に、バルコニーから手を振れるようになり、更には遠くの眺望を楽しむこともできるようになつた。子供の頃から不安に思つていた高所恐怖症は、時子自身も驚くほど、あつさりと消えていった。

哲夫と時子が知り合つたきっかけは、時子が就職して、初めて車を買つた時の販売員が哲夫だつたという、ごくありふれた出会いであつた。哲夫は工業高校の自動車科を卒業すると、専修学校の自動車科を経て、現在の会社へは、技術職として入社した。しかし、自動車の修理や点検をしながら観察していると、販売員の仕事が羨ましく、自分には販売の仕事の方が向いているように思へた。そして次第に転向したい気持ちでいたたまれなくなつていった。上司に転向の希望を伝えてみると、三年目に、偶然、技術職が過員で販売員が不足するという、哲夫にとつては、非常に都合の良い状況になり、あつさり希望がかなえられたのであつた。当然ながら、セールの仕事は、思つ

ていた以上に厳しかつた。それでも自分の力量や努力が、そのまま成績と給与に反映するので、怖くもあつたが楽しくもあつた。セールの最初は、誰もがやるように親戚や友人・知人を限らず訪ねた。しかし、それはすぐ限界になり、一日中歩き回り、当てもなく戸別訪問をした。ほとんどはドアを開けてもらえず、パンフレットや名刺すら渡せない。時には偶然のように、話を聞いてもらえる人に出会うと、先輩の教え通り、丁寧に粘り強く情熱的に語つた。幸い哲夫はもともと技術職だつただけに、車の構造と具体的な機械の説明には自信があつた。他のほとんどの販売員が、説明書だけの、通り一遍の説明しかできないのと比べて、哲夫は客の疑問や質問に、納得してもらへるまで詳しく、専門的な用語も駆使して説明することができた。そのせいもあつて、少しづつではあるが、販売成績は上がつていった。事務所に掲示された、販売成績のグラフを、こっそり楽しんで見られるようになっていった。

哲夫が当番で、内勤の或る日、母親と時子が来店して、今年就職したので、通

勤に使う車が欲しいと言つた。哲夫はさつそくいろいろアドバイスしながら細かく希望を聞き、それに合う何種かのパンフレットを見せ、さらに、展示車で説明した。客は二人で相談して一車種を決めた。話の成り行きでは、このまますぐに、契約となりそうな雰囲気の時哲夫は言つた。

「先ほどもちよつと申し上げましたが、この車種は一カ月後くらいに、少しモデルチェンジされて販売されます。性能には全く変わりありませんが、フロントの感じが少し変わるようです。特にお急ぎでないのなら、モデルチェンジした後の新車をご覧になられてから、買つていただいたほうが良いのではないですか。初めて乗つていただく車は、今後長く愛着がわくものです」

買おうとしている客に対して販売員のほうから、少し待つてはと言われた言葉に、二人は哲夫の客に寄り添う親切を感じて帰つた。

「自分が販売した客は、最後まで大切にしないさい。その人がすぐには買つてくれなくても、親切さの評判は、徐々に周囲に広がっていくものだ」

先輩のこの言葉を、哲夫は忠実に守っていた。自分の顧客の所へは、少しでも時間を見つけて、せつせと車の調子を伺いに回った。機械に詳しい特技を生かして、客のちよつとした不安や疑問にも、その場で詳しく説明し、時にはその場で簡単な調整をすることもあった。時子の家へも度々訪ねた。それは初めて車を持った時子と母親を安心させ、それが哲夫に對する信頼と好印象を持たせることになった。

S・Rマンションでの二人の生活は、最初はぎこちないものであったが、日を経るに従い、落ち着いた形になつていった。しかしごく最近、時子に微かな不安が芽生えていた。哲夫の様子がこのところ、なんとなく変化したような気がするのだ。もともと冗談の多い明るい感じだった哲夫が、時々何かを考えている様子で、時子の言ったことが聞こえていないような、心ここにあらずという状態の時があった。当然、セールスという、ある面では非常に難しい仕事をしているのだから、いろいろな難題やトラブルに直面することもあるだろうことは、時子にも想像できた。また、哲夫が時子に心配を掛けま

いとして、自分だけで解決しようと、必死に頑張っているのかもしれないと思つたが、今の哲夫はどうもそのような状態ではないようにも思われた。案外、全てが時子の思い通りか、それとも、時子自身、最近微熱が出て頭痛が消えないので、哲夫に申し訳ないと思いがら、精神的に少し滅入っているのが、憶測の原因かもしれない。とにかく一度それとなく聞いてみようと思つた。

哲夫が子供の頃、家は両親が石原商店という屋号で、八百屋を経営していた。一人つ子の哲夫は、忙しく働く両親の目が届きにくいのをよいことに、全く気ままな少年時代を過ごした。父の長一は毎日、朝早く軽トラックで市場へ仕入れに行き、荷台一杯の野菜や果物を積んで帰ると、早速母のこずえと二人で店に並べて値札を付けた。長一が仕入れ値から割り出した売値を言うと、こずえがその値札を作って青果の上に置いた。値段を伝える長一の声が、毎朝起きたしてきた哲夫に大きく聞こえた。こずえは仕事の合間に哲夫に食事をさせ、登校の準備をさ

せて送り出していた。子供の哲夫の目にも目まぐるしいほど、父母は動き回っていた。

しかし、二人が必死に働いていたにもかかわらず、商売をそのまま続けることはできなかった。哲夫が中学生になった頃、近所へ大手のスーパーが進出してきた。広い敷地に、大きな建物と広い駐車場が整備され、この辺りの風景と車の流れを、一変させてしまった。個人商店がいくら頑張っても、大きなスーパーとは太刀打ちできるものではない。打撃を受けたのは町の小売店のほとんどであった。これまでそれなりに安定した営業をしていた町の商店は、見る見るうちに店を閉じていった。もちろん、それぞれの店主たちは、何もしないでじつと閉店を受け入れていたわけでは決してない。これまで培ってきた商人としての誇りと意地と自信を持ち、更に、今後の家族の生活を掛けて、押し寄せる大きな波に立ち向かい、それぞれ力いっぱい足掻いたのだ。しかし、少々の時間差こそあれ、多くの商店は、開店休業の状態を一定期間を経て、完全な閉店へと進行していった。

中には、頑張っている間にますます膨ら
いだ負債に追われ、夜逃げのように、突
然家族全員が消えてしまい、長く親しく
付き合ってきた近所の者も、その行方を
知らないという家族もあった。ただ、あ
る程度の技術が必要としたり、個人商店
としての特徴が出せる種類の商売であら
ば、辛うじて生き残ることができた。し
かし、石原商店のように、市場で仕入れ
た生鮮食品を、並べて売るといふような、
単純な形態の商店では無理であった。スー
パーの商品の、圧倒的な種類と量の多さ
には、とてもかなわなかつた。スーパー
の開店と同時に、予想以上に客足は激減
した。野菜や果物は仕入れたその日のう
ちに完売するのが常識で、一日二日と残っ
ていけば、急速に商品価値が落ちるため
値下げをしなければならぬ。それでも
売れなければ生ゴミになり、仕入れ値分
の赤字になる。また、売れないかも知れ
ないと思つても、店を開けている以上は
ある程度の種類と量を仕入れなければな
らない。石原商店の商いは、悪い循環に
音を立てて回つていった。それでも長一
とこずえは執拗に頑張つて店を開けた。

若いころ、全くゼロの状態から、二人で
ここまでやつてきたという、意地だけで
突つ張つているように見えた。最初ガクツ
と売り上げが落ち、それからさらに、日
ごとに落ちていくのが目に見えて分かっ
た。これまで一日中動き回つていた長一
やこずえが、手持ち無沙汰になり、暇に
任せて、丁寧に何度も並べ変えた、野菜
や果物の商品台の横に座つて、店の前を
通る通行人を目で追つていた。近所の主
婦が、これまでの付き合いから、たまに
義理で買ひに来てくれるのを心待ちにし
ている、寂しそうな両親が、哲夫にも哀
れに思えた。

或る日、長一がこの不振を打開するた
めに、新しい商売を計画していることを、
哲夫はこずえから詳しく聞かされた。こ
ずえが哲夫に喋つたのは、哲夫の意見が
聞きたかつたというより、こずえ自身が
長一の計画に賛成すべきかどうか迷つて
いたからのものであつた。長一の計画は
大胆なものである。これまでこずえと二
人で、自分たちの体を動かすことによつ
て何とか利潤を得るといふ、手堅い商売
をしてきた長一には、不似合ひと思える

ような、大きな計画であつた。

この近郷では、病氣の見舞い品として
果物籠を持つて行つたり、葬儀や法事の
時に親類縁者は、果物や缶詰を盛つた大
きな籠盛を、供物として持つていくのが
風習になつてゐる。長一はそこに目を付
けたのだつた。もちろんこれまでの石原
商店にも時々注文があつて、その都度籠
盛を作つていたが、これからはそのよう
な、贈答用の籠盛専門の商店にしよう
といふのが、長一の計画であつた。

「これならスーパーではやつていない
し、仮にこれからやつたとしても、スー
パーの名札のついた進物より、専門店の
名札の方が見栄えがして、客にも喜ばれ、
決して負けることはない」

長一はいかにも自信ありげにこずえに
同意を促した。確かに贈答用の籠盛の注
文は、青果店にとつて非常においしいと
言われる商売であつた。普段はあまり売
れない高級果物や缶詰を、店の裁量で自
由に盛ることができるといふのだ。きれいで立
派に見えれば、客は十分喜んでくれる。
夜、籠を前に置き、相談しながら果物や
缶詰を盛つている両親の嬉しそうな顔を、

哲夫は時々見ていた。哲夫はこずえから長一の計画を聞いた時、これまで体力だけを生かして働いてきた長一とは、全く違ふ一面があつたことに驚いた。同時に、子供の自分にはわからない、大人の大きなようなものを感じ、そして尊敬と言える気持ち湧いてきた。

以後暫く、両親は絶えず新商売の相談をしていた。話が毎日行きつ戻りつして、二人とも決心がつかない様子が、こずえが哲夫に言う言葉の端々に表れていた。長一の計画は、これまで地道に蓄えてきた財産の全てを掛け、更には今後の家族の生活を掛ける、絶対に失敗の許されない計画なのだということを、哲夫もだんだんと切実に感じるようになった。

石原商店の経営は、全く成り立っていない。店を開けていても、仕入れ値すら回収できない赤字の状態である。そしてこの状態が、今後好転するという微候など、微塵もみられないし、考えられない。それどころか、時たま義理で買い物に来てくれていた近所の主婦たちも、顔を合わせるのが気まずそうになり、だんだん間遠くなっている。計画を実行するかど

うかの結論を早く出さなければ、まずまず傷口が大きくなるという焦りが、当然長一とこずえにあつた。

計画の実行には高いハードルがいくつもあつた。贈答用の籠盛が必要になる場面は、一般的に、個人や世帯にそう頻繁にあるものではない。これまでの石原商店のように、狭い範囲の客だけを相手にしているのでは、とても商売として成り立たない。できればK市全域ぐらいに、商圏をできる限り拡大しなければならぬ。そのためには広範囲に店名を認識させる、宣伝広告が必要である。また、信頼を得るためには、小さな八百屋のような店舗では信頼されないので、明るくきれいで、いかにも立派な贈答品が揃えられると思わせる、店舗に改築しなければならぬ。さらには、店を推薦してくれる、客を紹介してくれるように、冠婚葬祭会館などに、つながりを付けなければならぬ。これまで両親は、二人だけで話し合っていることが多かったが、最近哲夫のいるところでも相談するようになっていた。それだけ二人に期待と不安が交錯していたのだ。

「贈答品専門店は、市内にすでに五店はあるので、そこへ割り込み競争に勝たなければならぬ。後から割り込んで追い越すためには、今ある五店より、いろいろな面で優っていなければならぬ。最近ではゴルフのコンペにも果物を使うそうだから、そちらの方向も開拓しなくては」

ゴルフを全くやったことのない長一が、どこで得た情報なのか、まるで新しい鉾脈でも発見したかのように言った。長一は軽トララックで見て回った市内の各店の様子を、こずえと哲夫の前で意気揚々と話した。そして、その何日か後、新商売の計画を実行することに決心した。そして近々長一が銀行へ融資の申し込みに行くことになったと、こずえが哲夫に話した。この時点では、長一とこずえは、銀行に必要な額を簡単に融資してくれるものと思つて、全く疑わなかった。これまで石原商店として青果店を経営していた長い間、銀行は非常に親切で、預け入れも引き出しも、電話をすればすぐ行員がここにこしてやって来て処理をした。盆や暮れにはちよつとした品物が届き、年に

一・二度は支店長か副支店長が挨拶にやつて来た。さらに、店舗の建て替えや改造を勧め、その時には特別の低利での融資を約束していた。このような状態がずっと続いていたので、長一とこずえの頭には、新商売に伴う資金の準備を、全く心配していなかった。銀行へ行けばすぐ融資が受けられると思いいこんでいた。

長一とこずえの思惑は全く外れた。応対に出た副支店長は、長一の言う新商売の計画を聞いた後、融資をあつさり断つた。考えてみるとか、相談するという猶予の、全くない返答であった。長一は予期せぬ言葉に呆然となり、副支店長の顔を見たまま、しばらく動くこと喋ることもできなかつた。その後も、矢継ぎ早に何度か銀行へ行つたが、応対する副支店長の態度は、事務的で冷たく全く変わらなかつた。家に帰り、以前とはあまりにも異なる銀行の態度に、込み上げてくる悔しさや怒りを抑え込もうとして苦しんでいる長一は、傍にいる哲夫やこずえを心配させるほどであった。

頼りにして疑わなかつた銀行からの、融資の目的が立たなくなつたその瞬間、

これまで三カ月近く長一とこずえが悩んだ新しい商売の計画は、まるでマジシャンが指を鳴らすと籠の中の鳩が消えるように、一瞬で消え去つた。そしてそれは単に、長一の夢が消えたというだけでは済まなかつた。哲夫の家族にとつて、将来が全く見えなくなつてしまつたのだ。贈答品専門店の建設は、考えられるあらゆる方向から検討し、考えぬいた挙句の結論だったので、不可能になつた時の、そのショックは大きかつた。

石原家内の雰囲気はがらりと變つた。長一とこずえは家に閉じこもつたようになり、二人とも何をやる意欲も無くなり、互いに何も喋らず、ただ一日中ぼんやりしていた。長一は市場への仕入れにも行かず、石原商店は、カーテンこそしていいなかつたが、わずかに残っている缶詰や乾物など、少しの日持ちのする商品が、連日そのまま置かれていて、それも暫くすると腐敗する物が出始めたが、二人には片付ける気力もなかつた。哲夫は気が付くと黙つて、余りにもひどいのを処分した。哲夫はこのような場合、自分が何かをしなければならぬと思つたが、結

局何をしたら良いのかわからなかつた。両親揃つて、このままどうかやつてしまふのではないかと、いう不安を感じた。

半月ほどすると完全に閉店した。そしてそれがきっかけとなつて、長一に少し気力が湧いたらしく、知人の土建業の手伝いに行くようになった。ところがそれと時を同じくして、こずえが病氣になり、入院をしなければならなくなつた。この頃は、哲夫の進学相談の時期も重なつていたが、家族三人が話し合う機会も持たず、意思疎通が全く図られない状態にあつた。長一もこずえも哲夫もそれに気が付いてはいたが、それぞれが、自分から動き出す、意識の充実がなかつた。

「お前は希望している工業高校へ行け。家のことは何も心配することはない。俺もショックで暫くやる気をなくしてしまつたが、もう大丈夫だ。お前が元気に学校へ行けば、母さんも早く良くなるだろう。」

恐らく、石原商店が順調であつた時には、商売を継いで欲しいという思いもあつたであろうが、今の状況に逆らえない無念さが、長一のをぶりに滲み出ていた。

家の経済的な状況や、長一やこずえの

状態を考えると、哲夫はとても進学をする場合ではないと思い、明日にでも担任に伝えようと思っていたところ、長一はそれを察したかのように、哲夫に面と向かって、はっきりした口調で言った。

長一は順調に八百屋をやっていた時のこと、大きなショックを受けて店を閉めざるを得なくなった時のこと、そしてそれにまつわる記憶の全てを強引に消去して、白紙の状態にしてしまおうとするかのように、毎日、早朝から仕事に出て闇雲に働いた。恐らく長一にとつて、止まることは、過去への回帰になつてしまったまればなかつたのであろう。それを恐れているのが傍目にもわかるほど、身体を酷使していた。ところが、これまで長年やってきた仕事とは違つたため、極端に疲れるのか、哲夫には隠すようにはしていたが、家に帰るとそのまま知らずに眠つてしまふようなこともあつた。哲夫は長一の寝顔を見て、この時だけが銀行に対する恨み辛みを忘れられる、長一のもつとも安穩な時間かも知れないと思つた。

こずえの入院は予想以上に長引いた。八百屋の時には気を張つて動き回つてい

たが、精神的なショックで急に落ち込んでしまい、内臓の疾患が次から次へと表れてきた。長一が見舞いに行けないので、せめてこれぐらいはと思つて、哲夫はなるべく頻繁にこずえを見舞つた。哲夫の顔を見るとこずえは嬉しそうにしていたが、いつの時からか、あまり喜ばなくなり、話している途中にあらぬ方向へ目を向けたり、時には息子の哲夫に余所余所しい敬語を使うこともあつた。哲夫はこずえの様子に、もしかしたら認知症なのかもしれないと思つた。暫くして、見舞いに行つた哲夫は担当医に呼ばれた。

「お母さんのことですが、内臓の病気の方は順調に快方に向かつています。今日お話しするのはそのことではなく、最近お母さんに、認知症の症状が出てきたようで、看護師の話によると、ずっと以前の全く関係のないことを、一人で喋っていることがあるそうです。トイレに行けるようになったのは良いのですが、ところが、自分のベッドへ戻ることができない時があるようです。これは明らかに認知症の特徴です。本当はお父さんに伝えることですが、なかなかお会いできな

いので、貴方から伝えてください」

結婚と同時に購入したマンションは、これまでのアパートより格段に住み心地が良かった。自動車販売会社に勤める哲夫は、時子が結婚前に思っていた以上に、真面目で優しく親切で、時子自身が自分でも我儘と思うようなことでも受け入れてくれた。三カ月後、妊娠した時子は産前休暇をとつた。もし、休暇が認められず、看護師の職を失うことになつたとしても、それでも構わないと思つた。自分に訪れたこのチャンスも、どのような犠牲を払つても、成就したいと思つた。それが夫哲夫の希望でもあることを疑わなかつた。

朝七時三十分、出勤する哲夫を玄関で送り出し、バルコニーへ回る。十五階から見下ろすと、十円玉より小さく見える哲夫は時子を見上げ、手を上げて車に乗り込む。車は暫く農道を走り、最近できた小さな喫茶店の角を折れて、幹線道路を市街の方へ消えていった。

休暇をとつた時子の生活は、当然大きく変化した。市民病院での勤務は凄まじ

い。日中の喧騒や、深夜や早朝の急患で、時間を忘れて病院内を走り回っていた。その時とは違い、今の時子には、時間は止まっているかのように、ゆったりと流れた。哲夫を送り出し、朝食の片付けを済ますと、時子にはしなければならぬことは何もない。

晴れた日には、哲夫が買ってきて組み立ててくれた、バルコニーの小さなステンレスのテーブルの所へ、これも哲夫が買ってきて組み立ててくれた、アルミの椅子を出した。テーブルの上に紅茶とクッキーを用意して、小さなラジオでF・Mの音楽を聴きながら読書をする。退屈すると立ち上がって、バルコニーからぼんやりと遠くを眺める。市の中心部からその先に、太平洋の広がり、最近開港した空港までぼんやりと見えた。哲夫が選んだこの高層マンションの最上階、しかも角部屋のバルコニーは、近くに高い建物がないだけに、外界からは全くの死角になっている。何をしていても、どれ程だらしな性格や大胆な格好であっても、どこからも見られず、恥ずかしかることはない。時子は思った。

時子がバルコニーから、紙片を飛ばす面白さを見つけたのは、本に挟んでいた葉が、偶然、風で舞い上がった時であった。葉は、掴まえようとすると時子の指先を逃れ、バルコニーから飛び立った。高層階の複雑な風の流れがあるのか舞い降り舞い上がり、葉の動きは小刻みに震えながら、時には滑らかに滑った。時子はアゲハチョウを思い出した。小学校の高学年の頃だったと思う。夏休みの自由研究の課題に、アゲハチョウの採集をしたことがあった。毎日、公園や畑を走り回って、めったやたらと掴まえた。もちろん研究らしきことをするわけでもなく、採ってきたチョウを、単に菓子箱に虫ピンで止めておくだけであった。毎日のようにチョウを採集してくるし、女の子があまりやらない課題だったので、暫くすると、心配した母に注意されたほどであった。どうしてあの時チョウの採集に興味を持ったのであろう。確かにアゲハチョウは、色や模様の種類が多く鮮やかできれいである。この時母は、時子がアゲハチョウの美しさに興味を持ったようであらう。

あるが、本当は違っていた。時子の興味は、掴まえようとすると時子の虫網をかくぐり、ひらひら逃げるチョウを、それをつまめるのが面白かったのである。

葉は風に乗って全く予期せぬ方向へ滑って行った。その一分近い連続した動きは、退屈していた時子の目を見張らせた。

以来、時子は退屈になると、バルコニーから紙片を飛ばした。紙片はまるで生あるもののように、迷い・うろつき・躊躇い・彷徨いながら、小さくなっていた。バルコニーの手すりへもたれかかり、掴まんでいたスーパールのレシートを空中へ放った。それは暫く風に舞い、くるくる回りながら流されていった。また、一枚の紙片を飛ばした。今度は落下したかと思うと急に上昇し、左右に大きく蛇行しながら、遠く荒れ地の雑草の中へ吸い込まれていった。時には、目で追うことができなくなる程、遠くまで飛ぶものもあった。そしてそれらは、一つとして同じコースを辿ったり、予想したコースを辿るものはない。紙片の形状やその時の空気の流れの微妙な違いによって、飛翔の様子が異なるのであろうが、決して予測

のでできない、軽やかで滑らかでまるで天女の舞のような動きを、時子は見飽きることがなかった。

初めのうちは放つのは小さな紙片だった。しかし、紙片が大きいと、漂っている途中で紙自体の形状が変化し、飛翔時間も長く複雑になる場合が多い。時子はだんだん大胆になり、飛ばす紙片はどんどん大きくなっていった。さらには、紙だけではなく、いろいろな物を飛ばしてみた。レジ袋や哲夫が告別式でもらってきた、安っぽいハンカチを放つこともあった。レジ袋は風を一杯に孕み、高く高く舞い上がり、永久に落ちてこないかのように舞い続けた。白いハンカチは、ちようど子供のころ読んだ、絵本の空を飛ぶ魔法の絨毯のように、広がって横に滑り、時間をかけて漂いながら、空き地に軟着陸をした。すべての物は、バルコニーを離れた瞬間から、个性的で自由奔放で、まるで意思のあるような優雅な舞を見せた。時には、自分自身がその紙片に乗って漂っているような錯覚をすることさえあった。非日常的な不思議な世界を徘徊するようで、それは十分、時子を

開放的な気分させた。

その日、時子は朝から特に気分が優れなかった。微熱があり、ニーニーゼミのような耳鳴りと頭痛が、いつもより激しかった。その朝、ベッドにいる時子に、哲夫は声を掛け、そそくさと出て行った。時子は暫くベッドにいたが気分は晴れない。晴れない原因は、自身の体調不良にあることは確かであったが、更にその体調不良の一因は突き詰めれば、哲夫の最近のどことなく、余所余所しい振る舞いにもあるような気がした。哲夫があのよくな状態になったのは、何が原因なのだろう。いつからだろう。時子がそれとなく尋ねても、哲夫は「何もないよ」と言うだけで、それ以上進まなかった。もちろん哲夫の余所余所しさは、時子があるように感じるのであって、具体的に証拠を立てて、哲夫に詰問するようなはつきりしたものではない。絶えず頭の一角に息づいている疑問に、時子は確信の持てる回答を見つけられなかったが、先日、哲夫が叔父の家へ寄ったと言って、飲んで夜遅く車を置いて帰ってきたことがあった。時子には、あの日以来のような気がして

仕方がなかった。

哲夫が叔父の春治の家を訪ねたのは、父の法事の日時を報せるためで、しかも、セールスで近くに行ったので、思いついて寄ったのであって、この日でなければならぬ理由はなかった。叔父はちょうど晩酌中で、哲夫に、久しぶりに飲んで行けと誘った。哲夫は、両親の死後、いろいろと相談に乗ってもらったり、結婚式には両親の代理を務めてもらい、今後何かと助力を仰ぐに違いない叔父なので、誘われるままに上がり込んだ。すでに酒の入っている叔父は、非常に饒舌であった。ほとんどは、以前にも言っていたことで、哲夫の両親がいかに働き者で、大変な苦労をしたということを繰り返して、哲夫を前にして、哲夫の素直さや勤勉さを誉めた。酔っばらった叔父の言葉を、哲夫は適当に相槌を打って聞いていた。ますます酔いのまわってきた叔父は、それでも少々ためらった末のように話し出した。

「このことはすでに知っているかもしれないし、また、言わなくてもよいのか

もしれないが、お前たちの結婚式当日気が付いたことだが、時子さんの父親は、かつて銀行に勤めていた時、お前たち家族に非常に冷たい仕打ちをした、あの副支店長さんだな。俺もまさかと思つたが間違いない。長一兄さんの言つていた副支店長だった。俺は当時直接喋つたことがなかつたし、向こうは俺を知らないのさ。そういう話は出なかつたが、俺はお前の家で二・三度顔を見ているから間違いない」

哲夫は絶句した。先ほどまで叔父が喋つていたこととは、内容が余りにも大きく違つていた。確かに時子の父は現在大手の会計事務所勤めているが、以前銀行員であつたことは聞いていた。そして、父の長一からは、あの新しい商売を計画した際、信じていた副支店長に裏切られたと言ふ、怨念のこもつた言葉は何度も聞いていた。ただその両者が、哲夫の中で合致することはなかつた。長一の恨んでいた副支店長と、現在大手の会計事務所勤めている時子の父親とを、結びつけることは全く考えていなかった。哲夫の顧客として、度々時子の家を訪ねたり、

婚約してからも度々母親とは会つてゐるが、単身で赴任している父親はほとんど留守で、二度ほど会つただけで、いつも母親と娘だけであつた。もちろん、仮にその時点で時子の父親とじっくり会つたとしても、長一の言つていた副支店長の顔を知らない哲夫には、全く動揺はなかつたであらう。

叔父の言葉を聞いて、一瞬目の前が真っ白になつた。そして次には、打ちひしがれた両親の、最もみすばらしい時期の姿が浮かんだ。スーパリーのショックから立ち直ろうとして、躍起になつてゐた両親が浮かんだ。朴訥な長一の知恵を振り絞つて考えた新しい商売が、信じて疑わなかつた銀行に断られて、一瞬にして奈落に落とされた、あの日のあの一瞬の両親が浮かんだ。

叔父の家を出てマンションに着くまで、哲夫は一時間ほど、途中の堤防や河川敷を徘徊した。無意識的に、心の動揺がある状態で、時子と顔を合わせてはいけなうと思つた。これまで時子の父親は、哲夫の中では尊敬に値する人物であつた。銀行の副支店長から引き抜かれて大手の

会計事務所へ行つたコースは、八百屋にしがみ付き、見放されても八百屋から離れられずに死んでいつた長一と比べると、格段に上流階級の所業のように思えた。

仮に父親が恨むべく人物であつたとしても、何も知らない時子や母親には全く関係はない。恐らく父親にしても、哲夫が石原商店の息子であることを知らないであらうし、石原商店との当時の経緯など、全く記憶してゐないかも知れない。副支店長として、連日多くの商談を処理してゐたことであらう。毎日大きな規模の商談をこなす副支店長にとつて、石原商店との関係などは、全く記憶に残らない微々たる出来事であつたのではないだろうか。

時子は薄地のガウンを羽織つてバルコニーへ出た。少し冷たさを感じるようになった秋風が、全身の布をはためかせた。紅茶のカップと読みかけの女性雑誌を、バルコニーに出ているステンレスのテーブルへ置いた。

このテーブルと、二脚のアルミの椅子は、結婚して少しした頃、突然哲夫が買って

持ち帰ってきたものだった。どちらも何箇所かをポルトで締めるといふ、簡単な組み立て式であったが、それでも哲夫は丁寧に説明書を読み、自分たちの城を自分の手で作っているかのように、時間をかけて楽しみながら組み立てていた。側で見ている時子は、哲夫が自分たちの生活を大事にしてくれていることが嬉しく、また、頼もしく見えた。

雑誌を読む気にもならない。しばらくぼんやりしていた。時子は思いついたように、雑誌に葉として挟んであったレシートを抜き取り、つまんでいる手を上げて、風に乗せるように紙片を放った。紙片は時々くるくる回転しながら、幹線道路の方向へ消えた。バルコニーの手すりにもたれて暫くぼんやりしていた時子は、今度はテーブルの雑誌を手にとると、思い切ったようにその一ページを破りとった。雑誌大の紙片をバルコニーから放ったことはこれまでもあったが、それらは新聞折込のチラシがほとんどであって、雑誌から故意に破り取るというような乱暴なことは、今日が初めてである。紙片をつまんだ腕を思い切り上げて放つ瞬間、

紙面に大写しの女優の写真が、時子に笑いかけたように見えた。指先を離れた紙片は、暫く手の届きそうなバルコニーに近い上空を彷徨っていたが、次に予期せぬ状況になった。漂っていた紙片があるところか、バルコニーの上にあるパラボラ・アンテナの金具に引つかかったのだ。もちろん暫く待っていれば、自然に外れて再び飛んでいったであろうが、この時子は何故か待てなかった。何故か気持ちに余裕がなかった。すぐに座っていたアルミの椅子を、アンテナの下へ移動させ、椅子へ右足を掛けて立ち上がり、引つかかっている紙片を取ろうとした。片足をかけ伸び上がり、腕を一杯に伸ばし、紙片を掴まえた瞬間だった。片足立ちで体重を預けていたアルミの椅子が、急にガクツと前方へ動いた。単に遠い方向に移動したのではなく、少しひしげるような感じで動いたのだ。時子は一瞬のことで何事が起つたのかわからなかった。しかし、バランスを崩した中で、本能的に腰を曲げて左下のバルコニーの手すりに両手をつき、体重を預けた。生暖かい

が掌から伝わってきた。次に時子の目に映つたのは、気持ちよさそうに漂っている、先ほど破りとった笑顔の女優の紙片であった。バルコニーと同じほどの高さで波打つようにして、これ見よがしに気持ちよさそうに漂っている。この時、本来時子の胸近くまであるバルコニーの手すりが、椅子に片足を掛けて立ち上がったせいで、膝の上あたりにあつた。もちろんその気になって、ちよつと頑張つて態勢を立て直せば、全く何事もなかったように、いつもと同じ安穩な一日になつたであろうが、この時の時子は、すぐにはその方向を選ばなかった。紙片の写真の笑顔の女優が、まるで自分を待ち受けているかのように思えた。またその時の紙片の飛び方は、子供のころ追いかけたアゲハチョウにそっくりだと思つた。虫網を振り上げ、今度こそはと思つて伏せても、チョウは何事もなかったかのように、小さく上下しながら悠々と滑つていった。時子は手すりの太いパイプについている掌が、少しずつ前方へ滑っているのを感じていた。このままの態勢でいると、時を経ずしてどうなるかは、十分予測が

できた。じりじりと掌は滑っていたが、時子は舞っている紙片を眺めていた。

次の瞬間、直前まで眺めていた光景とは、あまりにも違っていると思った。もちろんアゲハは掴まえられなかったし、魔法の絨毯に乗っているようでも、天女が羽衣で舞うような優雅で軽やかな状態でもなかった。時子には暫く、急速に近づく駐車場の白線が見えた。

哲夫が警察からの電話を受けたのは、社で朝の打ち合わせを終えて、先日納車した顧客の所へ、調子を伺いに行く途中であった。警察からということ、奥さんがマンションから落ちたので、すぐ市民病院へ来いという電話に、哲夫は一瞬何も見えなくなったような感じがした。偶然、病院には近い所にいたので、短時間で着いたが、その間には、一体何事が起つたのか、ありとあらゆる想像をめぐらした。もちろん浮かんでくる場面は、悪い場面ばかりであったが、結局気持ちが混沌としたままの状態で、病院へ到着した。

玄関へ着くと、待っていた制服の警官

がまるで護送するかのようにして、哲夫を時子の部屋へ案内した。時子は既に白い布を被せられていた。二人いた私服の刑事の内の一人が、何事かを言いながら、白布をはぎ取った。まぎれもなく時子であった。顔は内出血のためか斑になり、全体に大きく浮腫んでいた。

「マンションの真下の駐車場で発見されました。奥さんの時子さんに間違いありませんね」

刑事の機械的で歯切れのよい言葉が、哲夫には体の芯まで浸透するように響いた。

「幸いお顔はきれいですが、全身に及ぶ骨折や内臓破裂で、ほとんど即死状態だったようです。なんとと言っても十五階ですから」

哲夫は眠っているような時子を見ながら、せいぜい三時間ほど前、いつもと同じようにバルコニーの手すりにもたれ、片手をちよつと上げて、車に乗り込む哲夫を、見送ってくれた時の、少し微笑んでいたような時子を思い出していた。この三時間ほどで、時子に一体何事が起つたのである。

「確認していただいたら、すぐマンションへ行ってください。不審死なので、捜査をして死因の特定をしなければなりません」

パトカーに先導される形でマンションに着き、部屋の前まで行くと、制服警官が立っていた。

「時子さんらしいということ聞いて、すぐ捜査しようと思ったのですが、鍵がかかっていたのとご主人がすぐ戻られるということだったので、私たちも取返して詳しく捜査せず、現状保存をしておきました」

病院から一緒に来た二人の刑事の内、年配の、寺本が説明した。寺本に促されるまま、哲夫は持っていたキーでドアを開けた。哲夫は自分の手元を、寺本が注意深く観察しているような気がした。

「今朝、部屋を出られた時と、変わっているところや異常な所があったら言うてください」

普段は意識せず見ている部屋を、緊張して意識的に眺めると、こんなにも感じが違うものかと驚いた。部屋の中には、異常な所はなかった。哲夫が朝食で使っ

た食器は、洗われて水切り籠に入っていた。掃除や洗濯はまだであったが、恐らく午後にもするつもりだったのであろう。

「朝と変わったところは何もありません」

言いながら、寺本と一緒にバルコニーへ出た。その光景は異常と言えは異常であった。一脚のアルミの椅子が、西側のフェンスの近くで上向きに倒れていた。時子のスリッパが離れ離れになり、片方は裏返っていた。そのこと自体は大した問題ではなかったが、その他が全く整っているため、異常の範疇に入ると思った。

ステンレスのテーブルには、ラジオが置かれていて、今も音楽を流している。紅茶のカップには、液体がまだ半分以上残っている。そして女性週刊誌が開いたまま置かれ、風でページがめくられていた。寺本は全体を見渡した後、倒れた椅子の所へ行った。椅子を持ち上げたりひっくり返して調べた後、部下に、手すりの高さや、手すりまでの距離を測らせた。手すりを舐めるように見たり、下の駐車場にいる警官と、何か会話を交わした。

部屋へ戻ると寺本と部下の刑事は、哲夫の立会いの下で、押し入れや戸棚や引

き出しを調べた。その後、哲夫に、朝からのことや普段の時子のことを、細かく尋問した。最近微熱が続き体調不良で病休を取っていることと、今朝も部屋を出る時には、起きられない状態だったことを伝えた。

「外部から何者かが侵入したような形跡はありませんし、自殺だったらテーブルの上を片付けて、スリッパも揃えてある場合が多いのですが、それもしてありません。しかも遺書もありません。恐らく何かの事情で、椅子に乘ろうとして滑ったのではないかと思われます。捜査の結論としては、不注意による事故死と断定します。あ、それから、倒れていた椅子のボルトが少し緩んでいました。もちろんそれが事故に関連しているかどうかは分かりませんが」

二人の刑事は帰っていった。哲夫には寺本の言った最後の言葉が、その部分にちよほどスポットライトが当たったかのように印象に残った。二・三日前、片方の椅子が少しがたつくとき子が言っていた。哲夫は再びバルコニーへ出た。倒れたままになっていた椅子を調べた。思っ

ていた以上にボルトが緩んでいる。これなら、重力が真下へ掛ければ問題はないであろうが、斜めに掛ければ、相当動く場合があると思われる。時子が言った時に、すぐ修理しておけばよかったのかも知れない。ボルトの緩みが事故に繋がったとは思いたくなかった。

哲夫は今日これから自分のなすべきことを、考えておく必要があると思った。しなければならぬことは無数に思いつくが、全てが断片的で、なかなか筋が通ったプログラムにならない。時子を確認した後、病院から両親に電話をしておいたが、揃って旅行先ということ、夕方ではないと来れないということであった。変わり果てた娘を見て、泣きわめく両親の姿が目につく。怒りや悲しみの持つて行き場がなく、哲夫を非難しなじるかも知れない。娘の夫としての哲夫を、百パーセント満足していたわけではないであろう。こうなった以上、両親には、哲夫に対する非難をためらう理由は何もないのだ。

これからしばらくの間、両親とは相談することも多く、度々接しなければなら

ない。父親とのことを叔父から聞いてからは、初めて会うのであるが、全く意識せずに会えるかどうか、哲夫は不安になった。

ある日の午後、S・Rマンションに近い通りにある喫茶店へ、刑事の寺本は入った。この店のマスターとは中学の同級生で、客の少ない時を見計らい、仕事の合間に時々寄っていた。この日も客は誰もいなかった。北側の窓際に座ってしばらくすると、マスターがいつものように珈琲を持ってきた。

「この間のマンションの事故は、偶然ここから見ていたので、目を閉じるとあの光景が浮かんで、暫く気持ちが悪かったよ。お前はあんなものを毎日よく見られるな」

寺本は窓からマンションを見た。距離はあるが遮るものがなく、全貌が見える。さらに、最上階の角部屋と焦点を限定すると、バルコニーの細部まで見えそうなきがする。

「初めはバルコニーにいる女性の、肩ぐらいまでしか見えなかったのが、暫くすると急に腰より下まで高く上がり、し

かも片手を差し上げて背を伸ばすという、変な格好をしたのだ。不思議に思っただけで、今度は手すりに寄り掛かって下を覗いているようだった。その状態で暫くいたが、次の瞬間思い切りよく飛び出した。新聞には事故になつていたが、あれは自殺だつたと思うよ」

マスターは既に何回か他の客にも話したのであるが、手際よく説明した。寺本は黙って聞いていたが、女性が片手を上げて背を伸ばした場面と、飛び出す前に手すりに寄りかかって、暫く下を覗いている場面が理解できなかつた。片手を上げて伸び上がったのは、一体何をしていたのである。そして不注意の事故であれば、手すりに寄りかかった瞬間に落ちるのであつて、覗いているという時間帯はないはずである。それでは自殺だったのであるか。それにしても動機が見えてこない。一応、近所や二人の職場の聞き込みはしたが、全く何の問題も浮かんでこない。裏に何か隠れているのだろうかとも思つてみたが、それも感じられない。とにかく事件性はないのだから、今さら無理にほじくることはないという

結論になり、冷たくなつた珈琲を飲み干して立ち上がった。了